

ばんけい

教育ほつとにゅーす  
かわら版こ みち  
教育の小径No.73  
11月号  
2014 November

今月のことば

あお あい い  
青は藍より出でて  
藍より青し

タデ科の植物である藍の葉からとる染料の色は、原料の藍よりもはるかに青く、美しいそうです。このことから、弟子が先生を越え優れていることをいいます。



国士舘大学教授  
北 俊夫先生

## 不登校問題にどう対処するか

- 不登校の子どもを出さないためには、日ごろから、どの子どもにも学級での居場所をつくり、一人一人に自己有用感を味わわせることがポイントです。
- 不登校ぎみの子どもには、初期対応が問題解決の鉄則です。教師には子どもの小さな変化を見逃さない鋭敏な観察力と深い洞察力が求められます。

今月の記念日

太平洋記念日(11月28日)

ポルトガルの航海士マゼランが、後に名付けられるマゼラン海峡を通過して太平洋に差しかけたのが1520年のこの日。太平洋と命名したのはマゼランで、穏やかな大洋という意味があるそうです。

## 不登校を出さない学級づくりを

学校を休みがち子ども、長期に欠席している子どもはいませんか。さまざまな理由や原因があるにせよ、その机に向かって座っているはずの子どもがいないと、学級担任として気になるものです。心が痛みます。

不登校の子どもをつくらないためには、担任として日ごろからどのようなことを心掛けておく必要があるのでしょうか。そのカギは学級経営にあると言えます。日ごろから、認め合い、助け合い、支え合う、支持的で共感的な人間関係づくりに努めます。子どもたちの間に「かかわり合う力」を育てることがポイントです。基本は孤立した子どもをつくらないことです。そのためには、学級や学校生活のなかでどの子どもにも役割をもたせ、自分は友だちの役に立っているんだという自己有用感を味わわせるようにします。

また、授業のなかでは学級の友だちに発言したり、友だちと協力して活動したりする機会をつくるなど、学級での居場所を設けます。例えば2~4人程度の小グループでの協同活動を取り入れ、友だちとかかわり合う場を意図的に設定します。週に1、2回程度集団遊びを促すことも考えられます。

こうした活動をとおして、一人一人の子どもに学級の一人としての自覚を

もたせ、学校生活への意欲と期待感を高めることができます。どの子どもにも孤立感をもたせないようにすることが大切です。

さらに、不登校の子どもを出さないためには、行動やふるまい、表情、発言など子どもの小さな変化を見逃さない、教師の鋭敏な観察力や洞察力が求められます。教師の「頑張っているね」「その調子で続けてね」「明日も待っているよ」など共感的な言葉かけが、子どもを勇気づけます。学校や教師に魅力を感じるようになります。これらの言葉は「明日の元気」につながります。

このように見てくると、最大の不登校対策は、不登校を出さないようにするための未然の予防にあると言えます。日頃から、不登校を出さない学級経営、学級づくりを心がけたいものです。

## 早期発見と初期対応がポイント

予防的指導を行っても、休みがち子どもが出てくることもあります。こうした不登校ぎみの子どもには、早い時期に対応することが早期解決につながります。時間が経ってしまうと、事案が複雑になったり、対応を困難にしたりすることがあるからです。

欠席した子どもにはその日のうちに保護者と連絡をとり、状況を聞き取り

ます。3日連続して休んだ子どもには家庭を訪問し、その子どもに直接会うなどして元気づけます。担任や学校の姿勢を保護者や子どもに示すことが保護者と状況や対応策を共有する機会になります。また、担任のこうした対応は不登校を早い時期に解決することにつながります。

当該の子どもを取り巻く周囲の子どもたちへの指導や働きかけも欠かせません。子どもの力が登校へのきっかけになることがあるからです。

不登校の原因は家庭にある場合が少なくありませんが、芽が小さいときに原因を取り除き、登校のきっかけをつくるようにします。

不登校ぎみの子どもの状況については、管理職や生徒指導主任などに逐一報告し、相談します。養護教諭は、担任の知らない情報を既にキャッチしている場合があります。校内での連携が欠かせません。これまでの経験などを踏まえた貴重な対応策などのアドバイスを求めることができます。担任が一人で抱え込まず、課題を学校として共有するとともに、協同で問題解決に当たることが何よりも重要です。事案によっては、相談機関や専門家に相談します。違った視点からのアドバイスを得たり、対応の仕方など知恵を借りたりすることもできます。

不登校問題への対処は、早期発見と初期対応がポイントだと言えます。

## 何げないひと言

次に紹介するのは、退職を控えたある校長が学校通信に書いた一文です。

「あのときから30年余りもたつが、今でも新巻の鮭を見ると、パツクリと開いた傷口に塩をなすりこまれたような痛みを覚える。当時、私は3年生の担任だった。放課後、子どもたちと書き初めや図画などをならばはじめた。その中にひときわ目だった大きな画用紙があった。それは、S君が提出したものだ。誠にすばらしいもので、感動的な作品であった。

『すごい。本物みたいだね。』

目の大きなS君の顔には、やったぜという得意そうな表情が浮かんだ。だがこのあとのひと言がいけなかった。

『お父さんに手伝ってもらったの?』

S君のお父さんは、私の尊敬する画家であった。S君の顔は、みるみるゆがみ、憎悪とも思えるまなざしで私をにらんだ。私は懸命に弁解し、謝ったが、すべてあとの祭りであった。

たったひとりで信頼関係が崩れてしまった。子どもの人格を深く傷つけた取り返しのつかないひと言であった。』

言葉は人を勇気づけます。逆に、内容によっては、相手の心を深く傷つけてしまうこともあります。この校長は、退職を前に過去の過ちを思い出したのでしょうか。何げないひと言はS君を傷つけただけでなく、この校長の心をも傷つけたのではないのでしょうか。時間が経っても、忘れられない苦い「思い出」として気になっていたのでしょうか。校長は加害者であり、自ら被害者にもなっていたのです。

退職直前の学校通信に寄せた一文から、私たちが発する言葉は、たとえ何げないひと言であっても、重い意味をもっていることに気づかされます。

## 3学期制への揺り戻し

2学期制を導入した地域や学校で、3学期制に戻す動きがあります。授業時数の確保などをねらいに移行した2学期制でしたが、ここにきてデメリットや課題が浮き彫りになり、顕在化してきたからでしょうか。

最も多い指摘は、子どもに渡される通知表(評価結果)が2回であることです。保護者や子どもたちからは、「課題が早めに伝えられたほうが、早く改善できる」という声が多く聞かれます。10月の初めにその学年の最初の通知表が渡されるより、夏休みに入る前の7月のほうがよいというわけです。

文部科学省の調査によると、平成25年度の2学期制の実施校は、公立小学校が20.9%、公立中学校が20%で、いずれも減少傾向にあります。平成25年度には群馬県高崎市、香川県高松市が、平成26年度は石川県金沢市、岡山県倉敷市、横浜市の一部が3学期制に戻しました。

一旦変えた制度を元に戻すときには、十分な説明責任が求められます。2学期制の実施について、教育的な観点から検証と評価が必要です。

金沢市教育委員会は、変更実施の1年ほど前(平成25年6月)に、学びのステップを重視して、1学期を「基礎」、2学期を「向上」、3学期を「充実」とした新しいコンセプトを学校や保護者などに示しました。

## コラム ものの見方・考え方とは何か(1)

### なぜ「もの見方・考え方」か

私たちは毎日の生活のなかで、さまざまな状況に遭遇しています。遭遇する状況には、社会や自然の現象だったり、知識や情報だったり、さらに人と人の出会いだったりします。

教師として仕事をしていくうえで、また一人の人間として生きていくために、それらの状況をどのように受けとめるか。どう理解するかということは、その後の行動を大きく左右します。この受けとめ方、理解の仕方を、ここでは「見方・考え方」としました。

「経営の神様」と言われた松下幸之助氏は『物の見方考え方』(PHP文庫)という名著を残しています。本書は昭和61年が初版ですが、現在76刷にもなっているベストセラーです。

私は本書を読みながら、ものを見た

り考えたりするときの「視点」をしっかりとつことは、状況を誤りなくとらえ、より正しい判断と方向性を導くうえできわめて重要であること、必要不可欠なものだということを実感しました。見方・考え方によって、対象の把握が変わるからです。

本書から、「調和は固定したものではなく、発展しつつあるもの」「人を使うものは苦を使う」「百八十度の視野」「水泳の先生から学理(学問上の原理や理論のこと)を習うたって君は泳がれん」など、含蓄のある言葉をたくさん学ぶことができました。

本欄では、ものを見たり考えたりする際の方法としての視点を毎号一つずつ紹介していきます。これらは、私がかれまでに身につけてきた状況に対する「見方・考え方」です。「見方・考え方」の引き出しに加えてください。

## INFORMATION

こんなときどうする!  
**学級担任の危機対応マニュアル**

◎著者 北 俊夫  
◎定価 950円+税  
◎発行 株式会社文溪堂  
A5判 96ページ



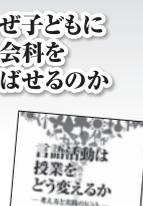
なぜ子どもに  
社会科を  
学ばせるのか

A5判 104ページ

なぜ子どもに  
社会科を  
学ばせるのか

言語活動は  
授業をどう変えるか

—考え方と実践のヒント—  
A5判 112ページ



## 編集後記

今号から連載コラム「もの見方・考え方とは何か」が始まりました。いわゆる“見方や考え方”に関する書籍はさまざまなかたちで世に出ています。学校現場の先生向けに、北先生ならではの切り口で“物事のとらえ方”をご紹介しますのは本紙だけです。どうぞ思考の整理にお役立てください。(T記)

企画・編集: ぶんげい教育研究所  
発行: 株式会社文溪堂  
発行日: 2014年11月1日